

テキストマイニング及び多変量解析を用いた
フォーカシング指向グループの体験分析
ーグループ・プロセスに関する仮説生成の試みー【第三報】

Experienced-based Analysis of "Focusing-oriented" Group
Using Text Mining and Multivariate-Statistics

- A Trial of Hypothesis Generation of Group Processes - 【Third Report】

押岡 大覚 *

鎌倉 利光 **

聖泉大学人間学部 *

愛知大学文学部 **

OSHIOKA, Daisuke Ph.D. *

KAMAKURA, Toshimitsu Ph.D. **

Seisen University * *Aichi University* **

要 約

本研究では、コ・ファシリテーター方式、一泊二日の宿泊形式により実施されたフォーカシング指向グループ（"Focusing-oriented" Group：以下、F.O.G.）ワークショップ参加者から得られた《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》に係る自由記述について、テキストマイニング及び多変量解析による分析を施し、F.O.G.のグループ・プロセスに関する仮説の生成を目的とした。その結果、《満足した点》では「自分のフェルトセンスの感受」、「メンバーの発言への傾聴体験」、「メンバーが言語化したフェルトセンス」、「グループでの気づき」、「聴くことの大切さへの気づき」、「集団雰囲気への感受」、「フェルトセンスの尊重」という構成概念が抽出され、それらをもとに仮説が生成された。一方《不満足な点・心残り・気がかり》では、「発言することへの憂慮」、「自分が言語化したフェルトセンス」、「メンバーとの心理的距離感」、「自分のフェルトセンスが感じられない」という構成概念が抽出され、それらをもとに仮説が生成された。ただし、これらの仮説は第3回から第5回F.O.G.モデル構成から得られたものであり、これまで、あるいはこれ以降実施されるF.O.G.モデル構成全般に汎化して考えられるか否かについては、一定の保留が必要である。

Key Words：テキストマイニング 多変量解析 フォーカシング指向グループ
グループ・プロセス 仮説生成

1. 問題意識と目的

本研究は、心理臨床家に対する教育・訓練を目的としたフォーカシング指向グループ（“*Focusing-oriented*” Group：以下、「*F.O.G.*」という）のグループ・プロセスに関する仮説生成研究の第三報である。

*F.O.G.*とは、通常 10 名前後で構成された小集団のなかで、フェルトセンス（*Felt-sense*）の言語化を介した集団的相互作用により、ファシリテーターを含めた参加者間の体験的相互作用が促進され、心理臨床家としての教育的訓練的な場として機能することを目的としたグループである（押岡・勝倉ら, 2011）。

押岡・鎌倉・寺原（2016）は、ファシリテーター 1 名、3 日間の通い形式で実施された第 1 回 *F.O.G.*参加者から得られた自由記述について、テキストマイニング及び多変量解析を施し、第一報として次のとおりグループ・プロセスに関する仮説を提出している。ここでは、グループ参加者が満足感を覚えるプロセスとして、「*F.O.G.*の参加者は、『他者との関わり感覚』により、安心できる存在としての複数の他者を感じ、その安心感を基盤として、集団内で多方向的な相互作用を経験する。そして、個人が『他者との関わり感覚』を覚える状態に入ると『自己の身体感覚』が賦活され『自己の発信』が行われるようになる可能性が考えられる。」と述べている。また、グループ参加者が不満足や心残り、気がかりを覚えるプロセスとして、「*F.O.G.*参加者は、『他者の身体内感覚を感じられない』状態であったり、『自己の身体感覚を感じられない』状態であったりすることによって、集団内で『自己の発信ができない』状態に陥り、不満足や心残り、気がかりを覚える可能性があると考えられる。」と述べている。

また、押岡・鎌倉ら（2017）では、3 日間の通い形式は維持しつつ、ファシリテーターへの負担等に配慮したコ・ファシリテーター方式による第 2 回 *F.O.G.*参加者から得られた自由記述について、第一報と同様の分析手続きを施し、第二報のなかで次のとおりグループ・プロセスに関する仮説を提出している。ここでは、グループ参加者が満足感を覚えるプロセスとして、「*F.O.G.*の参加者は、ファシリテーター及びコ・ファシリテーターを含む複数他者と相互作用を繰り返す中で『他者との関わり感覚』を覚える。この『他者との関わり感覚』は、『他者のフェルトセンスの感受』と関連しており、同時に『場のフェルトセンスの感受』とも関連している。この『他者との関わり感覚』、『他者のフェルトセンスの感受』、『場のフェルトセンスの感受』の 3 要因による好循環を基盤とした『フェルトセンスの言語化』による体験的相互作用の経験が、*F.O.G.*において満足感を覚えるに至るグル

ープ・プロセスである可能性が考えられる。」と述べている。また、グループ参加者が不満や心残り、気がかりを覚えるプロセスとしては、*F.O.G.*参加者は、「他者との距離感」及び「自己の発信が出来ない」というこの2要因の悪循環によって、不満や心残り、気がかりを感じる可能性がある、と述べている。

以上の先行研究により、3日間の通い形式におけるファシリテーター方式及びコ・ファシリテーター方式それぞれの*F.O.G.*グループ・プロセスに関する仮説が生成された。しかし、心理臨床家を対象とする*F.O.G.*モデル構成については改良の余地は残されている。

畠瀬(1990)は、集中的グループ経験は10日間や3週間といった長期集中的に行うことが一般的であると述べている。同時に、費用や施設の使用可能性の問題、グループ経験の満足度等々を考慮して、3泊4日を標準的に設定することを推奨している。しかし、心理臨床家の就業形態を概観すると、3泊4日という長い期間を費やして自己研鑽を積むことができる者は一握りであると思われる。

日本臨床心理士会(2016)による臨床心理士を対象とした動向調査では、非常勤のみの就業形態で臨床業務に従事している臨床心理士の割合は44.7%であった。また、2機関以上の複数機関で臨床業務に就いている割合は44.1%という結果が出ている。心理臨床家は常に教育・訓練の機会にひらかれていなければならない一方で、日本臨床心理士会(2016)による結果は、そのための期間を確保することが困難であるという現実を暗に示していると考えられる。しかし、心理臨床家に対する教育・訓練に携わる者としては、短期間で、より効果の期待できる教育・訓練の一形態を示す必要があると考えている。

そこで筆者らは、従来の*F.O.G.*モデル構成に改良を加え、コ・ファシリテーター方式はそのままに、一泊二日の宿泊形式による*F.O.G.*ワークショップを開催している。先行研究で掲げたとおり、3日間の通い形式によるファシリテーター方式で実施された第1回*F.O.G.*および3日間の通い形式によるコ・ファシリテーター方式で実施された第2回*F.O.G.*におけるグループ・プロセスに関する仮説生成研究は行われている。しかし、宿泊形式によるコ・ファシリテーター方式で実施された第3回から第5回*F.O.G.*におけるグループ・プロセスに関する仮説生成研究は発表されていない。

そこで、本研究では、コ・ファシリテーター方式、一泊二日の宿泊形式により実施された*F.O.G.*ワークショップ参加者から得られた《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》に係る自由記述について、テキストマイニング及び多変量解析による分析を施し、その構成概念を検討した後にグループ・プロセスに関する仮説の生成を目的とする。

2. リサーチ・クエスチョン

＜リサーチ・クエスチョン1＞ 第3回から第5回で共通した *F.O.G.*モデル構成における《満足した点》を構成する重要な要因にはどのようなものがあり、要因間にはどのような関係性があるのだろうか。

＜リサーチ・クエスチョン2＞ 一方、第3回から第5回で共通した *F.O.G.*モデル構成における《不満足な点・心残り・気がかり》を構成する重要な要因にはどのようなものがあり、要因間にはどのような関係性があるのだろうか。

3. 方法

3-1. 第3回から第5回 *F.O.G.*の実施形態、参加要件及び参加者の属性の異同

第3回から第5回 *F.O.G.*は、コ・ファシリテーター方式による一泊二日の宿泊形式、全7セッション（1セッション：90分前後）による集中型グループとして実施した。ファシリテーターは、米国 *The Focusing Institute* の認定コーディネーター資格を有する臨床心理士（70代・女）1名が担当した。また、コ・ファシリテーターは、フォーカシング及び集団精神療法を専門とする臨床心理士（30代・男）1名が担当した。

インターネット等の広告媒体及び電子メールによる募集活動を行った結果、事前の参加申し込みがあり、且つ、参加要件を満たした心理臨床家が、第3回 *F.O.G.*には5名（男：2名、女3名）、第4回 *F.O.G.*には4名（男：2名、女2名）、第5回 *F.O.G.*には6名（男：3名、女：3名）参加した（Table 1 及び Table 2 を参照）。なお、継続参加者と新規参加者の異同が同定できるように、Table 2 に示した参加者 *ID* は第1回及び第2回 *F.O.G.*から引き継いで記すこととした。

第1セッションの導入に際して、ファシリテーター及びコ・ファシリテーターは、便宜上その役割を担うが同時にグループの一参加者でもあるという姿勢を口頭で伝えた。また、セッション中は、フェルトセンスを尊重し、感じられたありのままを自由に言葉にしてみることが確認された。なお、各セッションの進行中、思考・感情・情動レベルでの交流へ傾きがちと感じられた場合、ファシリテーター及びコ・ファシリテーターは参加者の自由な語りを尊重する態度を保持しつつ、グループのなかの個人、あるいはグループ全体に対して、フェルトセンスの言語化を促す介入を行った。なお、*F.O.G.*の手続きの詳細は押岡・勝倉ら（2011）を参照願いたい。

Table 1 第3回から第5回 F.O.G.の実施形態及び参加要件

実施形態	参加要件
第3回 F.O.G. 200X年1月X日～	医療, 保健, 心理, 教育, 福祉の領域における臨床家(専門家), もしくは, これらの領域の専門学生, 大学生, 大学院生で, 守秘義務を遵守でき, 研究の意図に同意する者
第4回 F.O.G. 200X年7月X日～	
第5回 F.O.G. 200X+1年3月X日～	

Table 2 第3回から第5回 F.O.G.参加者の属性の異同

ID	性別	職業	臨床経験年数/学年	フォーカシング経験	F.O.G. 経験	
第3回	C	男	臨床心理系大学院生	修士課程2年生	約15回	3回目
	E	男	臨床心理系大学院生	修士課程2年生	約7回	2回目
	G	女	臨床心理系大学院生	修士課程2年生	約30回	2回目
	K	女	音楽療法士(補)	1年目	0回	1回目
	L	女	産業カウンセラー	2年目	2回	1回目
第4回	C	男	カウンセラー	1年目	約20回	4回目
	E	男	カウンセラー	1年目	約7回	3回目
	M	女	カウンセラー	1年目	約20回	1回目
	N	女	カウンセラー	1年目	約2回	1回目
第5回	C	男	臨床心理士	1年目	約20回	5回目
	E	男	カウンセラー	2年目	約7回	4回目
	N	女	カウンセラー	2年目	約4回	2回目
	O	女	臨床心理系大学院生	修士課程1年生	1回	1回目
	P	女	臨床心理系大学院生	修士課程2年生	3回	1回目
	Q	男	臨床心理系大学院生	修士課程1年生	1回	1回目

3-2. 調査方法及び分析材料並びに分析方法

セッション終了毎に, 野島(2000)を参考に作成した参加者カードを配布し, 《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》について自由記述を求めた。その際, 自由記述の内容は, ①他の参加者には開示しないこと, ②研究目的以外では使用しないことを参加者に確かめた。

参加者カードから得られた自由記述の分析は, *IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0* (以下, 「*TafS*」という)を用いて, 以下の手続きに則り行った。

参加者カードから得られたすべての自由記述を, 可能な限り原文に忠実な形で *Microsoft Excel 2010* (以下, 「*Excel*」という)へ打ち込み, ローデータの作成を行った。ローデータの作成にあたっては, 《満足した点》についての自由記述と, 《不満足な点・心残り・気がかり》についての自由記述をそれぞれ別のシートに打ち込んだ。また, ①第何回 F.O.G.における, ②誰の, ③第何セッションについての, ④何文目の自由記述であるのかが同定できるよう, 自由記述一文毎に ID を割り振った。なお, 自由記述欄への記入がなかった場合は「(無記入)」との打ち込みを行った。

Excel に打ち込まれたローデータを *TafS* にインポートした後, 記述者の心の動きを把握

することに重きを置く感性分析によりキーワードを抽出した。抽出されたキーワードをカテゴリとして抽出する際には、樋口 (2004), 山西 (2011), 林原・藤井ら (2011), 林原・川崎ら (2011), 大和 (2010) 等の先行研究を参考に、暫定的な基準として出現頻度 10 回以上のキーワードを第一次カテゴリとして機械的に抽出した。抽出された第一次カテゴリ及び出現頻度 9 回以下のキーワードに対して、①日本語・英語で記された内容, 例えば, 「フェルトセンス」と「*Felt-sense*」の統合, ②意味による統合—例えば, 「自分」, 「自分自身」, 「私」の統合, ③単体では意味の付与が困難なキーワード, 例えば, 「いる」, 「ある」, 「なる」の削除, を中心とした洗練作業を施した。その際, ①どのキーワードをどのカテゴリに追加したのか, ②どのカテゴリ同士を統合したのか, ③どのカテゴリを削除したのか, そして, ④それぞれの理由, の 4 点を記したカテゴライズメモを作成し, *TAFS* による分析過程の可視化を行った。なお, カテゴリの洗練作業等は, 先行研究及びカテゴライズメモを参照しながら, 共同研究者との意見交換を行い修正・検討を行った。

洗練作業が飽和状態に達した第二次カテゴリを統計学的に要約する目的から, *TAFS* より得られた第二次カテゴリを変数とした主成分分析を行い, 《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》についての主成分をそれぞれ抽出した。なお, 本研究では統計解析ソフトとして, *IBM SPSS Statistics 19.0.0.2* を用いた。

4. 結果

4-1. <リサーチ・クエスチョン 1>について

参加者カードから得られた《満足した点》(n=181)について, 感性分析によりキーワードを抽出した結果, 521 個のキーワードが抽出され, 出現頻度 10 回以上のキーワード, ①自分 (56 回), ②感じる (41 回), ③する (38 回), ④できる (37 回), ⑤ある (34 回), ⑥メンバー (29 回), ⑦いる (27 回), ⑧いう (24 回) ⑨なる (22 回), ⑩フェルトセンス (20 回), ⑪つく (16 回), ⑫言葉 (16 回), ⑬話 (16 回), ⑭体験 (15 回), ⑮セッション (14 回), ⑯思う (14 回), ⑰聴く (14 回), ⑱グループ (13 回), ⑲気づく (13 回), ⑳ない (11 回), ㉑なか (11 回), ㉒点 (11 回), ㉓その (10 回), ㉔もの (10 回), ㉕対する (10 回), ㉖発言 (10 回), ㉗話す (10 回) の 27 個を第一次カテゴリとして機械的に抽出した。機械的に抽出した 27 個の第一次カテゴリ及び出現頻度 9 回以下のキーワードについて, 複数回の確認・洗練作業を行った結果, ①自分 (70 回), ②できる (61 回), ③発言 (59 回), ④感じる (41 回), ⑤メンバー (40 回), ⑥気づく (27 回), ⑦グループ (27 回), ⑧フェルトセンス (20 回), ⑨聴く (15 回), ⑩体験 (15 回), ⑪内面 (11 回)

という 11 個の第二次カテゴリが生成された。

TAJS より得られた《満足した点》を構成する 11 個の第二次カテゴリを統計学的に要約するために主成分分析を行った (Table 3 を参照)。

Table 3 《満足した点》の主成分分析の結果

変数	主成分1 自分の フェルトセンスの感受	主成分2 メンバーの 発言への傾聴体験	主成分3 メンバーが言語化した フェルトセンス	主成分4 グループでの 気づき	主成分5 聴くことの 大切さへの気づき	主成分6 集団雰囲気 の感受	主成分7 フェルトセンス の尊重
発言	0.05	0.36	0.38	0.23	-0.47	0.16	-0.31
体験	-0.02	0.20	-0.28	0.15	-0.61	-0.20	0.61
感じる	0.36	-0.29	0.22	0.01	-0.11	0.48	0.44
フェルトセンス	0.39	-0.33	0.30	-0.11	0.16	-0.12	0.26
できる	0.29	-0.32	0.23	-0.09	-0.40	-0.36	-0.39
自分	0.53	0.20	-0.26	0.16	-0.10	0.10	-0.19
メンバー	0.19	0.33	0.46	-0.01	0.16	-0.45	0.17
内面	0.48	0.16	-0.34	0.00	0.12	0.25	-0.17
気づく	0.19	-0.02	-0.20	0.62	0.31	-0.42	0.06
グループ	-0.18	-0.04	0.35	0.65	0.11	0.32	0.00
聴く	0.11	0.60	0.19	-0.28	0.23	0.10	0.14
固有値	1.55	1.35	1.31	1.14	1.04	1.01	0.92
累積寄与率	14.11%	26.37%	38.28%	48.62%	58.06%	67.21%	75.60%

主成分 1 は固有値 1.55, 主成分 2 は固有値 1.35, 主成分 3 は固有値 1.31, 主成分 4 は固有値 1.14, 主成分 5 は固有値 1.04, 主成分 6 は固有値 1.01 であった。主成分 7 は固有値 0.92 であるが, 主成分 7 までの累積寄与率が 75.60% であり, 十分な論証可能性を勘案し, 主成分 7 までの 7 成分を主成分として採用した。

《満足した点》の主成分 1 は, 変数「自分」「内面」「フェルトセンス」「感じる」が正の方向へ特に大きいという特徴を示していた。そこで, 主成分 1 を「自分のフェルトセンスの感受」と解釈した。主成分 2 は, 変数「聴く」「発言」「メンバー」が正の方向へ特に大きく, 「感じる」「できる」「フェルトセンス」が負の方向へ大きいという特徴を示していた。そこで, 主成分 2 を「メンバーの発言への傾聴体験」と解釈した。主成分 3 は, 変数「メンバー」「発言」「グループ」「フェルトセンス」が正の方向へ特に大きく, 「自分」「体験」「内面」が負の方向へ大きいという特徴を示していた。そこで, 主成分 3 を「メンバーが言語化したフェルトセンス」と解釈した。主成分 4 は, 変数「グループ」「気づく」が正の方向へ特に大きいという特徴を示していた。そこで, 主成分 4 を「グループでの気づき」と解釈した。主成分 5 は, 変数「気づく」「聴く」が正の方向へ特に大きく, 「できる」「発言」「体験」が負の方向へ大きいという特徴を示していた。そこで, 主成分 5 を「聴くことの大切さへの気づき」と解釈した。主成分 6 は, 変数「感じる」「グループ」「内面」が正の方向へ特に大きく, 「できる」「気づく」「メンバー」が負の方向へ大きいという特徴を示していた。そこで, 主成分 6 を「集団雰囲気の感受」と解釈した。主成分 7 は, 変数「体

験「感じる」「フェルトセンス」が正の方向へ特に大きく、「発言」「できる」が負の方向へ大きいという特徴を示していた。そこで、主成分7を「フェルトセンスの尊重」と解釈した。

4.2. <リサーチ・クエスチョン2>について

参加者カードから得られた《不満足な点・心残り・気がかり》(n=158)について、感性分析によりキーワードを抽出した結果、445個のキーワードが抽出され、出現頻度10回以上のキーワード、①感じる(35回)、②する(25回)、③なる(25回)、④いる(24回)、⑤フェルトセンス(22回)、⑥ある(19回)、⑦いう(18回)、⑧メンバー(18回)⑨ない(17回)、⑩自分(17回)、⑪グループ(15回)、⑫話(15回)、⑬思う(14回)、⑭言葉(13回)、⑮気がかり(12回)、⑯セッション(10回)、⑰気(10回)の17個を第一次カテゴリーとして機械的に抽出した。機械的に抽出した17個の第一次カテゴリー及び出現頻度9回以下のキーワードについて、複数回の確認・洗練作業を行った結果、①発言(50回)、②感じる(46回)、③自分(29回)、④気がかり(28回)、⑤グループ(25回)、⑥フェルトセンス(22回)、⑦メンバー(18回)という7個の第二次カテゴリーが生成された。

TAfSより得られた《不満足な点・心残り・気がかり》を構成する7個の第二次カテゴリーを統計学的に要約するために主成分分析を行った(Table 4を参照)。

Table 4 《不満足な点・心残り・気がかり》の主成分分析の結果

変数	主成分1	主成分2	主成分3	主成分4
	発言することへの憂慮	自分が言語化した フェルトセンス	メンバーとの 心理的距離感	自分のフェルトセンスが 感じられない
発言	0.56	0.48	-0.18	0.03
自分	0.44	0.39	0.50	0.38
フェルトセンス	-0.20	0.56	0.08	-0.75
感じる	-0.40	0.55	-0.50	0.23
気がかり	0.69	0.17	0.18	-0.19
グループ	-0.46	0.50	0.19	0.33
メンバー	0.53	0.01	-0.64	0.06
固有値	1.66	1.29	1.02	0.91
累積寄与率	23.77%	42.17%	56.67%	69.66%

主成分1は固有値1.66、主成分2は固有値1.29、主成分3は固有値1.02であった。主成分4の固有値は0.91であるが、主成分4までの累積寄与率が69.66%であり、十分な論証可能性を勘案し、主成分4までの4成分を主成分として採用した。

《不満足な点・心残り・気がかり》の主成分1は、変数「気がかり」「発言」「メンバー」「自分」が正の方向へ特に大きいという特徴を示していた。そこで、主成分1を「発言することへの憂慮」と解釈した。主成分2は、変数「フェルトセンス」「感じる」「グループ」

「発言」「自分」が正の方向へ特に大きいという特徴を示していた。そこで、主成分2を「自分が言語化したフェルトセンス」と解釈した。主成分3は、変数「自分」が特に正の方向へ特に大きく、「感じる」「メンバー」が負の方向へ大きいという特徴を示していた。そこで、主成分3を「メンバーとの心理的距離感」と解釈した。主成分4は、変数「自分」「グループ」が正の方向へ特に大きく、「フェルトセンス」が負の方向へ大きいという特徴を示していた。そこで、主成分4を「自分のフェルトセンスが感じられない」と解釈した。

5. 考察

本研究は、コ・ファシリテーター方式、一泊二日の宿泊形式により実施された *F.O.G.* ワークショップ参加者から得られた《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》に係る自由記述について、テキストマイニング及び多変量解析による分析を施し、グループ・プロセスに関する仮説の生成を目的として行った。その結果、*F.O.G.*参加者が満足感を覚えるに至るグループ・プロセスとして、次の仮説が考えられた。

第3回から第5回の *F.O.G.*参加者は、ファシリテーター及びコ・ファシリテーターを含む複数他者と相互作用を繰り返す中で、「メンバーが言語化したフェルトセンス」を含む「メンバーの発言への傾聴体験」により、「聴くことの大切さへの気づき」を「グループでの気づき」として実感した。また、「集団雰囲気への感受」を伴いながら「自分のフェルトセンスの感受」も可能となり、結果的に「フェルトセンスの尊重」という心的態度が醸成された。以上が、*F.O.G.*において参加者が満足感を覚えるに至るグループ・プロセスであると考えられる。一方、*F.O.G.*参加者が不満足や心残り、気がかりを覚えるに至るグループ・プロセスとしては次の仮説が考えられた。

第3回から第5回の *F.O.G.*参加者は、「自分のフェルトセンスが感じられない」状態、あるいは「自分が言語化したフェルトセンス」に対して気がかりを覚えると、グループの場において「発言することへの憂慮」を覚え、その結果、「メンバーとの心理的距離感」ができてしまう。以上が、*F.O.G.*において参加者が不満足感等を覚えるに至るグループ・プロセスであると考えられる。一方で、不満足等を覚えるプロセスについては別の可能性も考えられる。すなわち、何某かの事由により「メンバーとの心理的距離感」を覚えたメンバーは、「自分が言語化したフェルトセンス」に対して気がかりを覚えたり、そもそも「自分のフェルトセンスが感じられない」状態にあたりすると、「発言することへの憂慮」を覚えてしまうという可能性である。

ただし、これらの仮説は第3回、第4回、第5回の *F.O.G.*ワークショップから得られた

ものであり、これまで、あるいはこれ以降実施される F.O.G.モデル構成全般に汎化して考えられるか否かについては、一定の保留が必要である。

以下、今後の課題及び今後の展望について述べておきたい。

F.O.G.の実践を行う上で、先に掲げた仮説あるいは仮説の構成概念について、ファシリテーター及びコ・ファシリテーターは、必要に応じてグループのなかの個人あるいはグループ全体に対して介入する必要があることは言うまでもない。なぜなら、《満足した点》の構成概念やグループ・プロセスに関する仮説は、その取り扱いを誤れば参加者の《不満足な点・心残り・気がかり》になり得る危険性を備えているからである。また、《不満足な点・心残り・気がかり》の構成概念やグループ・プロセスに関する仮説は、その取り扱いによってはグループ全体の雰囲気や個人の心的変化の好機にもなり得る可能性があるからである。F.O.G.に参加する心理臨床家に対する教育・訓練の質の維持・向上のためにも、今後、F.O.G.ファシリテーター及びコ・ファシリテーター養成を行う必要があると考えている。

最後に、本稿を含め F.O.G.のグループ・プロセスに関する仮説生成研究は3編刊行されている。今後、これまでの F.O.G.モデル構成から得られたデータを統合し、F.O.G.モデル構成における共通のグループ・プロセスに関する構成概念を抽出し、総合的な仮説の生成を試みる予定である。

謝辞

本研究の執筆にあたり、第3回～第5回フォーカシング指向グループワークショップへご参加いただいた心理臨床家の皆様へ深甚なる感謝を捧げます。

文献

- Gendlin, E.T. (1964) : A Theory of Personality Change. In Worchel, P. & Byrne, D. (eds.) , *Personality Change*. New York: John Wiley. 100-148.
- Gendlin, E.T. (1981) : *Focusing*. New York: Bantam.
- Gendlin, E.T. (1996) : *Focusing-Oriented Psychotherapy: A manual of the experiential method*. New York: Guilford.
- Gendlin, E.T. & Beede, J. (1968) : Experiential groups, Instructions for groups. Gazda, G.M. (ed.) , *Innovations to group psychotherapy*. Bloomington, IL: Thomas. 190-206.
- 畠瀬 稔 (1990) : エンカウンター・グループと心理的成長 創元社
- 林原 慎・藤井志保・宮里智恵・伊藤圭子・平川幸子 (2011) : 小学校における国際理解の視点をとり入れたジェンダー教育の効果に関する研究 広島大学学部・附属学校共同研

究紀要 39, 249-254.

林原 慎・川崎正盛・小早川善伸・安松洋佳・中村千絵・深澤・清治・平川幸子 (2011) :
多文化共生社会の視座に立つ小学校外国語活動の単元開発に関する研究ーテキストマ
イニングによる効果の分析 広島大学学部・附属学校共同研究紀要 39, 177-182.

樋口耕一 (2004) : テキスト型データの計量的分析 : 2つのアプローチの峻別と統合 理論
と方法 19 (1), 101-115.

Klein, M.H., Mathieu, P.L., Gendlin, E.T., & Kiesler, D.J. (1970) : The Experiencing Scale. *A
Research and Training Manual*, 1, 56-63.

村山正治(1980) : エンカウンター・グループの過程でフォーカシングを導入した一事例 日
本心理学会第44回大会発表論文集 637.

日本臨床心理士会 (2016) 「第7回『臨床心理士の動向調査』報告書」一般社団法人日本臨
床心理士会

野島一彦 (2000) : エンカウンター・グループのファシリテーション ナカニシヤ出版.

OSHIOKA, Daisuke (2009) : Possibilities and problems of group interactions with emergence of
words from the felt-sense. *The 21st International Focusing conference in Japan, Program
Book*, 3.

押岡大覚 (2011) : フェルトセンスの言語化を介しての集団的相互作用を用いた心理臨床家
の教育・訓練モデル構成に関する実証的研究 東京成徳大学大学院博士論文.

押岡大覚・勝倉孝治・白岩紘子 (2009) : Felt-sense の言語化と集団的相互作用に関する量
的視点からの検討 日本人間性心理学会第28回大会発表論文集 62-63.

押岡大覚・勝倉孝治・白岩紘子 (2011) : 心理臨床家養成のためのフォーカシング指向グル
ープへの継続参加とその効果に関する研究 人間性心理学研究 28 (2), 39-50.

押岡大覚・鎌倉利光・寺原美歩 (2016) : テキストマイニング及び多変量解析を用いたフォ
ーカシング指向グループの体験分析ーグループ・プロセスに関する仮説生成の試みー
【第一報】 聖泉論叢 23, 1-12.

押岡大覚・鎌倉利光・寺原美歩 (2017) : テキストマイニング及び多変量解析を用いたフォ
ーカシング指向グループの体験分析ーグループ・プロセスに関する仮説生成の試みー
【第二報】 聖泉論叢 24, 33-44.

押岡大覚・白岩紘子 (2008) : Felt-sense Focused Group に関する基礎的研究 日本人間性心
理学会第27回大会発表論文集 142-143.

- Purton, C. (2007) : *Focusing-Oriented Counseling Primer*. UK: PCCS Books.
- Rogers, C.R. (1970) : *Carl Rogers on Encounter Groups*. New York: Harper & Row, Publishers, Inc.
- 佐治守夫・石郷岡 泰・上里一郎 (1977) : グループ・アプローチ 誠信書房.
- 坂中正義 (2005) : 構成的エンカウンター・グループにおける心理的安全性を重視したファシリテーションー「深めない工夫」と「プロセス的視点」 教育実践研究 13, 111-120.
- 白岩紘子 (2006) : 吐く息を意識する「からだ ほぐし」とフォーカシング 目幸黙僊・黒木賢一 (編) 心理臨床におけるからだー心身一如からの視座 朱鷺書房 132-153.
- 白岩紘子・井上澄子 (1985) : FOCUSING による GROUP WORK の試み 日本応用心理学会第5回大会発表論文集 35.
- Yalom, I.D. & Vinogradov, S. (1989) : *Concise Guide to Group Psychotherapy*. American Psychiatric Press, Inc.
- 山口 隆・増野 肇・中川賢幸 (編) (1987) : やさしい集団精神療法 星和書店
- 山西博之 (2011) : 教育・研究のための自由記述アンケートデータ分析入門 : SPSS Text Analytics for Surveys を用いて Retrieved from <http://www.mizumot.com/method/yamanishi.pdf> (2017年1月5日).
- 大和里美 (2010) : キャリア教育における参加型授業の有効性に関する検討ーテキストマイニングによる効果分析 太成学院大学紀要 12, 139-149.